

論を批判の対象にし、第3章では足尾の賃金水準を技術進歩とのかかわりに踏み込んで分析を行っている。

何故に足尾銅山を特定し研究の対象として選んだのか、そして何故に日常的な労働運動ではなく暴動なのであろうか。著者はそのことについて冒頭に見解を述べているが、この点については後で再び触れることになるであろう。評者(今津)はこれまで労働問題を研究領域に含めたことはなかったが、この著作は技術に関する分析に多くのページが割かれているところから、評言を求められたのであろうか。著者が本書にかけた本来の意図からすれば、ミスマッチの書評との誹を受けることになるであろうが、評者なりの足尾ないし日本の産銅業への関心について述べることから始めよう。

## II

鉱山業は航海術とともに近代貨幣経済と世界的交通という近代社会を成立せしめる2本の柱の技術的基盤をなすものであるが、それは同時に近代技術の源流をなしている。ことに産業革命期の産業技術の多くは、この双方の技術的系譜に由来する。しかし後発工業国の日本では、その近代化の条件は19世紀後半の世界的規模における金本位制と交通・通信体系の成立という組織化され、制度化された機能の強力な作用を受容することになった。

近代日本における第1次産業の変容は、1870年前後における世界的規模において成立した交通・通信体系と貿易の拡大に深いかかわりをもっていた。なかでも鉱業部門はその顕著な例証といえよう。石炭は東アジアを航行する蒸気船の燃料として急速な開発が開始された。銅鉱山は自由貿易の開始に伴う貨幣の素材として注目され、やがて世界的な電信線網の整備、なかでも海底電信線の素材として急速な需要の伸びがみられた。さらに20世紀に入ると電灯の普及に始まる電気事業の拡大が莫大な銅の需要を呼び起こした。

また19世紀末から20世紀初頭にかけて成立し発展した交通・通信体系、そして電気事業(エネルギー供給体系)という技術体系は、日本の鉱山業に対して需要の側面において市場を拡大し、鉱山業の発展に促進的要因として作用したばかりではなく、これら技術体系それ自体が鉱業技術の多くの分野において急速な技術的変革を迫った。そのことが石炭や銅の急激な生産力の増大を促す要因として作用した。

二村一夫

### 『足尾暴動の史的分析』

— 鉱山労働者の社会史 —

東京大学出版会 1988. 5 xiii+366 ページ

## I

この著作は副題にあるように鉱山労働者の社会史的研究を意図したもので、いわばその素材として1907年の足尾暴動を取り上げ、労働問題と労働運動史の研究に新生面を開こうとした意欲的な論争の書である。豊富な資料を縦横に駆使し実証的な研究方法によって論旨を展開しているが、足尾暴動そのものの実態を、いわゆる実証史的に捉えようとする歴史研究を必ずしも目指したものではない。構成の主要な部分は一応別個の3つの論文からなっている。また書かれた時期も異なり、最初に書かれたものから20年以上の歳月が流れている。第1章は友子同盟を通じて丸山真男氏の「原子化された労働者」説批判を展開し、第2章では大河内一男氏の「出稼型」

さらに鉱山業と交通の発展は電力の利用という新しい要因が加わって、重化学工業の成立を促進する方向に向かって動き出そうとする徴候すら見せ始めていた。

しかし1910年代に入ると、それまで日本の貿易の発展を支えてきた1次産品の輸出は総じて次第に停滞の徴候を見せ始めてくる。鉱山業について言えば、詳述する余裕がないので方向性についてだけ述べるが、内外の諸要因が複合的に作用して海外資源との競争に対して不利な条件が表面化してきたからである。第1次大戦の勃発によって事態の進展に一時ブレーキがかかるが、1920年代に入ると石炭は撫順炭に、銅はアメリカ銅に圧迫されることになる。日本は石炭も銅もかつての輸出国から輸入国へと転換を遂げることになる。かくて日本の鉱業は輸出から内需へと重点を移し、輸入防圧を目指して前述のように重化学工業への移行が大きな課題となる。やがて、そこに資源小国日本の姿と日本経済の二重構造の輪郭がようやく見え始めるのである。いわばその転換点を背景にして展開されたのが足尾暴動であったのではない。

### III

日本における鉱山業の近代化過程は高度な近代地質学、採鉱学、冶金学等の専門的知識をもった極少数の御雇外国人技師の提言の線に沿って開発に着手した。しかし現実には鉱山で展開された開坑・採掘等の作業形態それ自体は、当時の日本の実状に即して伝統的な方式を踏襲し、いわば拡大化の過程をたどった。しかし掘進の速度や出鉱量をあらかじめ予定されたリズムに従って恒常的・安定的に、しかも効率よく運搬することこそが近代の技術体系、ことに19世紀末の世界的規模での交通体系の成立が求めた最重要な技術的条件であった。そのためには運搬系統の諸設備を整え、各坑道の適切な管理を経営の側において明確に把握しておくことが何より必要であった。鉱山業の近代化過程において運搬部門が重要視されたのは主としてこのことに由来する。ことに石炭産業は最初、定期航路の給炭を主要な目的としていただけに、銅鉱山よりその条件ははるかに厳しかった。

それはともかく鉱石や資材の運搬等の直接運搬にかかわる部門の電化が急速に進展したのと同じく、自然条件に比較的左右されないうえ採掘作業を進めることができるように電気発火のダイナマイトを利用

したり、排水作業や坑内の照明に電力を利用したのも、基本的には先に述べた技術的条件に従ったものであった。このことが坑内の坑夫の労働に対して、表面的には作業形態にさしたる変化をみないままに労働力の量的拡大を図る必要に迫られ、高賃金で彼らを迎える一方で、運搬系統の近代化に伴って飯場制度の変質が着実に進むことになった。足尾はその先駆者であった。この間の事態の変化については歴史的資料に基づく精緻な分析が本書のかかなりの部分を占めて展開され、極めて説得的である。

次に交通・通信体系のもたらした技術的条件で指摘しなければならないのは、需要の急激な増大に対応する量的拡大もさることながら、むしろ銅の品質の向上が緊急な課題であった。なかでも電気技術の求める銅の品質はそれまでの貨幣や銅製品とは異なるはるかに厳しいもので、純度の高さのみならず、均質な成分を保持し、しかも同一形体の製品を大量に生産することであった。これに応えるために精錬部門の技術的変革が運搬部門とともに重要な課題となった。電気分銅法や電気精銅法の導入がその条件を満たすものとして期待された。しかしそれは精錬部門にのみとどまるものではなく鉱石の採掘や粉碎に始まって、焼鉱、熔鉱、鍊銅に至る産銅業のすべての生産工程にその技術的条件は貫かれ、その影響は波及していった。それは当然のことながら労働過程においても近代的労働形態への移行を促進することになった。やがてこのことが採鉱部門との労働条件のアンバランスを際立たせることになるが、この著作はその推移の分析においても実態に迫る意欲的なものとなっている。

### IV

以上に述べたように産銅業における運搬と精錬の工程を特に取り上げ、19世紀末から20世紀初頭にかけて世界的規模で発展した技術体系との関係について考察した。著者は特に技術体系との関係を指摘して分析を進めているわけではないが、本書において展開された足尾銅山の各現場における作業の技術的分析は、技術体系が生産の場においてどのような作用を及ぼしたか、ことに労働形態の変化に及ぼす作用を知り得る極めて優れた実証的な史的分析となっている。

最後に暴動を敢えて取り上げた著者の意図についてであるが、歴史的現象、とくにその変動の過程をダイナミックに考察することの重要性を強調するこ

とにあったものと思われる。それは歴史認識の根幹にかかわることで、少なくともそのための問題提起をしたことだけでも著者の努力は認められてよいように思われる。さりとて、いわばスタティックな歴史的な分析との関連性、つまり変動と変容の関係について考察を深めるべき多くの課題を今後に残していることは否めないであろう。

明治期の世界貿易の拡大は横浜、神戸以外にも足尾という鉱山町を突如として出現させた。この町はそれまでの日本の都市にはなかった多くの近代的要素をもっていた。鉱山業の大きな特質は企業、労働者、技術者等の発生の問題だけではなく、工業都市の形成に先駆けていち早く鉱山町の形成を必然的に伴っていたことである。鉱山労働者の社会史的な考察には賃金水準や労働者の組織と同時に鉱山町の形成に注目すべきであろう。

[今津健治]